

『教義に関して信徒に聞く』 試訳(2)

岡村 祥子

『教義に関して信徒に聞く』は、次号でしかもニューマンにとって最後の『ランブラー』誌で発表された。その内容と文体は、すでに説明した背景との関連からとりわけ重要である。

ニューマンが『ランブラー』の問題とアイルランド大学の問題を関係付け、彼独自の使命についての語り方から、次のことが明らかになる。即ち、生き生きとし教育のある信徒の存在が、後のカトリック教会の概念と神学にとって根本的であるだけではなく、彼の作品は細部にいたるまで信徒の発展神学としてみるのがもっとも実りあるアプローチである。そうすれば、カトリック教会での彼の生涯を通して、なぜニューマンが苦しんだか、またなぜそれほどまでに深く苦しんだかが一層理解できる。

オリエル学寮の教師の時のように活動的なのは教会内での彼の使命ではないと、ニューマンはごくゆっくりと、しかもしぶしぶと悟っていった。彼は信徒を指導し、教え、彼らの必要を満足させるのではなく、むしろ、彼らの必要性のことで苦しみ、それについて書く方がよかった。そして、将来の聖職者と信徒の世代が恥じ入って、よい精神でともに働けるように、英雄的に慈悲を実践するべきであった。約8年ほど前、アイルランドに出かける前の1851年に、彼は信徒をいつも「カトリック精神の尺度」として言及していた。『彼らは3世紀前に、アイルランドの教会を救い、イングランドの教会を裏

切った。われわれの支配者は正しく民は臆病者であった。』今や、彼はほとんど反対の状況に見える事態に注意を向けていた。『ランブラー』をめぐる論争とそこで宣言された精神のために、彼がその渦中に放り込まれたのは疑いない。彼を憤慨させたのは司教団ではなく、彼が非常に尊敬していた一人の司教ウラソンが信徒に取った態度であった。ウラソンにとってさえ、信徒はその責任の範囲内での事柄で、相談される権利をもつ責任のある大人の協力者というよりはむしろ、霊的に「永遠の少年」に過ぎない。ニューマンが徹底的に神学的考察に曝そうとしたのはこの点である。

『教義に関して信徒に聞く』は、まず英語の慣用語法とラテン語の神学的用法の違いについての堅苦しい議論で始まる。ラテン語の‘consult’の意味は「相談する」だが、慣用的に「判断を仰ぐ」や、同様に「事実を確かめる」という意味を含んでいる。だから、信徒に聞くのは、当然使徒伝承の証言としてその信仰を尋ねることであり、教会のどのような教義もその使徒伝承に従って決定されるのである。『ランブラー』前号の反撃を受けることになった文章で使われた言葉は、このような慣用語法的な意味であった。即ち、「多数の証言を聞く」という意味で「信徒に聞く」のである。ニューマンは少々皮肉まじりに、母国語を作り直すことはできないと述べ、ラテン語の論文で必要とされるあの表現の完全な語法上の正確さがないのは身勝手に不誠実の印だ、と極めつける人々を非難している。

ニューマンは今度は攻勢に出て、厳密に神学上の意味においてでさえ、信徒は聞かれる権利があると主張する。それはキリスト教世界の信徒の合意が不謬の教会の声であるという理由で、信徒の集団は啓示された教義の事実の承認であるからである。

しかしながら、この信徒の合意がある時代には教父たちの沈黙を補うとはいえ、厳密にはこの合意が無謬であるのではなく、むしろ合意は誤りなき教会の判断の道具、または証なのである。それにもかかわらず、教義は信徒の

要求で決定されてきた。実に、時に信徒の性急さが恐れられるほど、信徒は敬意をはらわれてきた。しかし、常に信徒の要求は司牧の忠実な反映であり、人々は司教が自らを映す鏡であったからだ。ニューマンは皮肉な調子に戻って、次のように言っている。「人は鏡を『見て』、自分について他の方法では知ることのできない多くを学ぶ。」

更に信徒や住民や国民の共通の合意は聖アウグスティヌスが指摘するように、まさに教会の懐の中に我々を留める主な要因である。また、「聖書ではっきりと述べられていない事柄に関しては、神の民の習慣か、または先祖のしきたりが法とみなされるべきである。」

ニューマンはこの議論を、信徒の合意の特徴を5つあげて締めくくっている。それは使徒的教義の事実の証言、キリストの神秘体の内奥にある直感のようなもの、聖霊の導き、信徒の祈りへの返答、また誤りへの警戒心、誤りをすぐに躓きと感じとる警戒心である。

特徴の2番目と3番目がニューマンの教えの核心に通じる。キリストの神秘体の奥深い直感は、明らかに推論する感覚と対であり、各自の信仰と良心の判断に観念的同意とは逆の現実的同意をくだす能力である。

5番目の特徴はニューマンの自由教育の弁護と関連している。即ち、本性上の真実は決して啓示に反するものではない。彼が説明として、『英国国教会の困難』から「生命の特性は肉体の中のいかなる異物も受け入れられない」を、引用しているのは意味深い。オクスフォードの大学生として、カトリック教徒を認める彼の立場の基礎は上記の言葉と態度からであった。活力と誤りを排除する力を与える真の独立心を身につけるために、若者は誤りを犯すことを恐れてはならない。

ニューマンはここでアリウス派の論争での信徒の証を詳細に考察している。彼らの証言は伝統の声であり、ほぼ4世紀の大半、ニケア信経は、聖座や公会議、司教の確固とした信仰によってではなく、信徒の合意によって守

られたのである。したがって、一時的に教える教会の機能が停止したというのは、司教団が互いに対立し、信仰告白に失敗したからである。証言内容を細部にわたって考察した後、教える教会が必ずしも教会の不可謬性の有効な機関ではなかったとニューマンは記している。つまり、教える教会が分裂して異なった意見を述べるか、全く沈黙してしまったので、信徒の合意が使徒伝承の正統な機関となったと彼は言っている。確かに四世紀には有効な指導力がなかったために、権威の座にある人々には非常に不快なやり方で、信徒が真理に対する自らのセンスを表現したのである。

ニューマンは次にアリウス派異端での信徒の忠実さの証言資料にむかう。信徒の合意はカトリック教義の神学的前提のひとつであり、例えば、「無原罪の御宿りの教義」の決定が問題となった時のように、必要な時にのみ明らかになると結論づけている。自らの考えを発展させた一連の出来事から得た自信に基づいて、皮肉を交えながら、彼は次のように続けている。アリウス派のような異端はもう起こらないだろうし、今は信徒の証言を必要としないで、立派にやっつけていける時代ではあるが、(多分このために信徒の合意は多くの人々の意識にのほらないのだろう) 教会のそれぞれの部署が相応しい機能を持ち、どこもないがしろにされてはならない。

ニューマンはここで主要な神学的原則を宣言する。それは「信仰の事柄に関して、信徒は聖職者の反映とか反響にすぎないが、『司牧者と信徒の協力一致』には重要な何かがあり、それは司牧者だけにあるものではない」というものであった。このことは過去のアリウス派の問題の時だけではなく、信徒を教育し、当時の教会組織の中でその地位を確立させようとして空しい努力を重ねた結果起きた今の不幸な論争にも含まれると彼は明らかに感じている。

信仰心は下から始まるし、熱意は奨励しなければならない。「教える教会」が「信徒に聖なる教義を勉強させず、彼らには教会の言葉への『黙従』を要

求し、教育ある階級を無関心に、貧しい階級を迷信に走らせてしまうよりも」、熱心な一派を味方にする方が幸せである。

英国国教会時代の初めから、ニューマンはカトリック的考えの豊かさを強調してきた。『キリスト教教義発展論』を先取りしたオクスフォード大学の説教で、この考えを次のように説明している。その豊かさとは何百万もの信徒の魂の隠された生命のことであり、その真理を公にしないまま過ぎた何世紀もの隠された生命、聖マリアが全てのことを心に留め、そのため神的真理を受け入れ学んでいく点で、私たちの信仰の手本となった隠された生命のことである。

信徒の合意で試されるのが、カトリック的考えの豊かさである。この豊かさは、宗教教義を形づくるのに適切な比喩的言語を通してのみ伝えられる。しかしながら、この考えには天上的原型があり、この地上的考えとその天上的原型の間にある一種の関係は存在するが、その他のいかなる地上の考えにはそれがないという意味で、誤解の可能性は非常に大きい。そして科学的説明や論理的分析をいろいろ試みるが、終局的に全てが不可能や矛盾に終わるとき初めて、この現実の豊かさが単一の概念や説明方法だけでは決して得られないことが分るのである。

避けがたい変化の必要に迫られて異端が起こり、そのために教会は啓示の意味内容を一層明らかに定義せざるを得なくなる。このようにして教義の発展が進む。それは、「本来の教義をいっそう綿密に理解し、明確に説明することである。」「しかし、教皇、公会議、司教、信徒から離れた教会とはいかなるものか。」

チャドウィック教授が指摘しているように、『教義に関して信徒に聞く』の重要性は、ニューマンが教義発展論の主要な問題点を、おおやけに解決しようとした最初の試みということである。ここで、ニューマンが問題にしたのは、教義決定の前に教会の精神はいかに見出されるかであった。

この論争を以下の記録が決定的に裏付けている。1859年7月21日、アクトンはシンプソン宛にニューマンは『ランブラー』を得て上機嫌であると書いている。その中で、「教育問題について論説風に」という記事を次号（5月）でニューマンが書き、7月号で、「彼はジロウ氏を取り上げるつもりである」とアクトンは言っている。司教がこの文に鉛筆書きで、「この考えが『信徒に聞く』にでていたのか」とあった。ジロウは『ランブラー』のデリンガーの記事を非難する64ページの小冊子を出版したところであった。このデリンガーの記事は1858年8月号のランブラー誌で、アウグスティヌスがヤンセニズムの父であるというアクトンの発言に証明を与え、正当化しようとするものであった。杓子定規なジロウにとって、アウグスティヌスがヤンセニズムを教えたか、教えなかったかが問題であって、もし教えなかったなら、そのようなことを考えるのは愚か者か悪党ぐらいであるということであった。またこれはデリンガーほどの卓越した神学者が後ろ盾になっているので、ばかげた発言ではなく、悪意のある動機からでたもので、したがって、必ず即座にローマへ告訴しなければならないということであった。

白か黒かという論理に閉じ込められた精神には異端の発展にしろ、教義の発展にしろ、どちらもまったく理解できなかったにちがいない。それで、あるひとつの異端、アリウス派の場合の起源と繁栄と抑圧に不可避免的に伴う複雑さについて、また教会の精神が具体的に自らを明示する方法を取り上げて、ニューマンはジロウに歴史の講義をしようとしたのかも知れない。

デリンガー自身5月26日にニューマンに手紙を書き、ジロウの小冊子に答えるべきかどうか尋ねた。「学校の一般的な神認識のなかの歴史的無知という厄介な問題に私を巻き込むために、あなたは『ランブラー』に餌をまいたのだ。」しかしこれ以上デリンガーが介入すれば、ランブラー誌の評判をいっそう落とすだけだとニューマンは感じたようである。

バーミンガム・オラトリーにあるニューマンとジロウの未発表の手紙のや

りとりは、この経過のなかで特別に考慮する価値がある。ニューマンが記事を書いたとき、何を考えていたかがいっそう正確にわかるからである。ジロウはアショー神学校の神学の教授の座に23年間あり、1877年の彼の葬儀のおり、「聖書の言葉そのもの、教会の権威ある教え、聖座の誤りなき決定、理性の証明、物理学か数学の文句なしの証明、以上のものだけに彼は満足した」と言われた人だった。彼は有能で、建築家、化学者、発明家であったが、限界もあった。少々風変わりで、たとえば、腕時計を発明したがそれで大学のクロノメーターを調整すべきであると主張したりした。

文通は5月12日に始まり、その日、ジロウはデリンガーへの返事の写しをニューマンに送り、『ランブラー』5月号掲載のいくつかの表現や方針に「非常に問題がある」と抗議した。彼は、特に次の「最近の無原罪の御宿りの例のように、教義決定の準備段階においてさえ、信徒が聞かれるならば」という言葉を例にあげた。

5月13日のニューマンの返事は辛辣でそっけないものであった。問題にされた文章は彼の責任だと認め、異議をもっとくわしく述べるように求めた。今までの『ランブラー』の編集方針について、「私は今月号以前は、あなたと同様、直接にしる間接にしる『ランブラー』と関係がありませんでした」と述べた。

ニューマンは手紙をウラソンに送ったが、5月15日付けの返事で、彼はニューマンとは反対のジロー側についていたようである。ランブラーの記事に言及されている1848年頃の教皇書簡についてウラソンは次のように言っている、「その意味は無原罪の御宿りについての聖職者の考えと、慎重な方法でだが信徒の感情とを確かめるよう司教ひとりひとりに要請することであった.... 信徒の意見を確認する方法について、特に慎重であれとの命令については、信徒自身の意見ではなく、司牧者の意見を確認するべきと私は理解していた。というのは司牧者は、一般的に、実践的な信心業から確証を得て

いるからだ。』

教える教会と教えられる教会の関係について続けて彼は言う、「刻印は封印が押されてのみ存在する。封印があるのに、当然あるはずの刻印がなければ、そこにある刻印は別の印のものにちがいない。」

ニューマンは封印の比喩を採り入れて、後でおおいに修正して使っている。一方ジロウは文通の継続に熱心で、5月15日の次の手紙で、前号と同様、批判的な精神で『ランブラー』5月号を読んだことを認めている。ニューマンが編集者になったことを知って、彼は満足の意を表した。正義が悪を打ち負かし、司教の支配が確立し、『ランブラー』の正統性がついに保証されたと。

しかしジロウは引き下がらなかった。信徒に聞くという問題の言葉は「教会の不可謬性は信徒の共同体に存在し、もっぱら、教える教会が独占するものではないとすれば、不可謬の教える教会が誤りのない決定に至るために、誤りやすい信徒に相談することになる。しかし、上の考えは少なくとも異端に近いものである」と。

ニューマンは5月16日に返事を送り、後に記事の中で使われることになる多くの比喩（たとえば晴雨計）を用いて、彼は教会の不可謬性は教える教会だけにあるというジロウの見解に反対している。

「かえって、印は封印と蠟の両方にあり、先ずなによりも、封印をつくる者の心にあるので、不可謬性は一致した両者にあるというペローネ師の考えがわかります。」と述べている。

さらに、5月25日付けの手紙で、ニューマンはジロウに教会の不可謬性を教える教会にのみある「教義決定の特権」と混同しているのではないかと尋ねている。「正確であろうと心がけていても、科学的真理を表すのに、正確を期することは大変難しいことです。非科学的でありふれた‘consult’という言葉、あたかも、判断を専門家にまかせるかのように神学的な意味にあなたがとられた理由はよくわかります。それはあなたが神学者だからです。

問題は普通の英国の信徒が文章をそんな風に理解したかどうかなのです。」

7月に『ランブラー』の記事が出版されるとジロウは攻撃に戻った。8月28日の手紙で、司牧教会（教える教会）の機能が一時停止することはあり得るというニューマンの主張に、はっきりと反対し、教会が信徒の絶対的な信頼を要求するのは正当だと主張した。そうでないと主張することは、「教会に対して用心するように」という信徒への警告となるだろう。だから、この記事の考え方でいくと、「よく考える人は教会の不可謬性を軽視するようになり、教会全体としては誤らないかもしれないが、教える教会と教えられる教会のどちらかは間違うかもしれないと考えたり、またどちらかが間違っていないとすれば、不可謬性は教える教会ではなく教えられる教会にあると考えるようになる。そうすると弟子が師にまさるものとなるかもしれない。この考え方と、個人的な判断を教会教義上の権威より上におく考えとの間にはあまりない。」

「この記事が出たのは私が機会を与えたということで、少なくともある程度私自身のせいであると意識しているので、この件に関する私の印象を語るのは義務のように思われる。」という、もとの手紙の注から、ニューマンは先ず、短いが親しみをこめた返事を考えていたのは確かであるが、考え直し、ジロウの長い手紙のために、もう一度厳密な言葉の違いを教えようと決心したにちがいない。9月2日の返事でニューマンは「未決定」は「失敗」を意味しなかったと抗議している。

「この言葉は『一時停止』さえよりはるかに軽い意味なのだ、『司教団』という言葉は『語られている当時の実際の司教の集まり』で、それ以上のものではなかった。」信徒の絶対的信頼に関しては、彼の言う弊害に終わりかねない信徒の絶対的信頼を信徒に教えこむ可能性について述べているにすぎないのだとニューマンは繰り返している。

しかし、本当にニューマンを怒らせたのは、ジロウが「実質的に信仰の根

本という重要な点で」お互いに異なっていると主張したかなりいい加減な態度であった。

「あなたの言葉のもつ強さに気付いておられないと思います。信仰の問題について、相手にそのような言葉を用いるのは、非常な侮辱です。」そしてニューマンは未発表の手紙の草稿で、「信仰の問題でそのような言葉を相手に発する者は、終わるべきところで始めているのです。その人は忠告する権利も影響を与える可能性も失っています。」と付け加えた。

9月16日のジロウの返事では、ニューマンの論法の微妙な点も、信仰の根本で二人が違うという主張に対するニューマンの強い反対も、ジロウには理解できなかったことが示されている。彼は抗議して「私たちが信仰の点で異なっているとは言わなかった。あなたが教会を全体として一致によって不可謬であるとみなしている信仰の根本について、それがどんなものか私にはわからないのです。だから、それは信仰の問題であるとは言えない。私が信仰に属する事として考えたことと矛盾しないで、教える教会の機能が一時的に停止することは起こり得ないと主張したのだ。しかし、信仰に関する事柄は、明白な教義の決定による信仰とは何かだけではなく、信仰からくる論理的結論も含むのである」と言っている。

この手紙を受け取った後、ニューマンは明らかにこれ以上返事をするのは無駄であると感じたにちがいない。しかし、後にみるようにジロウはそれ以後3ヶ月間もこのことにこだわった。

彼自身の問い、即ち、決定の前に教会の精神をどのように見出すことができるかについてのニューマンの答えの内容は、反対者にも明白であった。もし教会が信徒に聞く義務があるなら、教会は聖職者と信徒の合意として自らを完全に明示する義務もある。この信徒の態度は迷信深いか無関心であり、信仰に関して観念的な同意しかできない盲従する現在の信徒の態度とは全くちがっている。

また、彼の返事はアクトンとも一線を画すこととなった。アクトンの関心は教会の政治面にあり、教会を司祭職にある役人の活動とみなし、良心を抑制力のなくなった聖職者の権力と必然的に衝突するあの特別な能力と考えるようになっていた。ニューマンにとって、そのような考えは個人の良心の限界を十分に考えているものではなかった。なぜなら、個人の良心は、世界全体の判断を反映しているかぎり、不可謬性を主張できるものと彼は考えていたからである。「世界の確固とした判断」のために彼は教会に入ったのであり、これは「信徒の合意」が教会の誤ることのない声であるという彼の考えの中心にあるものである。これは教会を政治的側面からではなく神秘的側面から見ることである。ニューマンが個人の良心を教会全体の共同体の良心においてのみ完成されると考えているのは明らかである。一方が他方の鏡であり、時にはそこに自らをいっそう明確にみることができ、その鏡によって個人の道徳的洞察力は成就され、完成され、養われる。この神秘的側面においては、教会は政治的集団とか個人の良心の集合体以上のものである。教会はダイナミックであるがゆえに、現実の共同体であり、個人の良心を生き生きとさせ、救うことのできる癒しの力をもっている。そして、教会だけが知的センスと霊的センスを備えたあの感受性を保つことができる。この感受性こそ、完全な人、聖なる人の秘密である。

このように、ニューマンは教皇の政治権力の使用と乱用だけではなく、1870年の教皇の不可謬性の教義の公布も切り抜けることができた。なぜなら、彼はあの不可謬性を、神秘体が現実に存在する共同体として在り続けるのに必要な方法とみなしたからである。それゆえ、ニューマンは教皇を哲学者としてではなく、治世者とみなした。すなわち、「彼は我々がおしゃべりする間に窒息死する。」そして、教皇の姿を借りて教会は、言葉ではなく一撃で、低い知力の人間に語りかけ、哲学者の肩衣ではなく神秘的なしるしで刺繍のほどこされたマントを身にまとった。

しかし、知的なカトリック出版界のこの悲劇の主役たちとの文通、会合、誤解のさなかで、ニューマンは彼らの基本的な論点、すなわち、彼らが出会った反対の本質は教会の健康不良と機能不全の兆候そのものであるということを決して否定しはしないかった。詭弁家と呼ばれる危険を犯しても彼が主張したことは、この病気には一層深遠で神学的分析が必要であるという点であった。彼は聖職者にではなく、聖職者と信徒の合意のうちにのみ存在する教会の十全さが明示されるべきであると要求した。このことこそがニューマンにとってなくてはならないものであった。しかし、それは聖職者と信徒の両者の譲歩によってのみ実現可能であった。

信徒は教育を受けることに同意しなければならないし、そう忠告されることを侮辱ととして腹を立ててはならない。しかし、教育は知的、霊的成長が時と場所とを同じにして行われるように、独特の方法でなされねばならない。また、同じ個人という場が哲学の殿堂であり、信仰の神殿でなければならない。

聖職者も譲歩し、霊的差別をやめ、信徒と共に働くことに同意しなければならない。例えば、カトリック大学の中において、「聖職者と信徒が出会い、お互いに理解し、譲り合うことができるような、中間地点を作ることに同意しなければならない。そうすれば、不信へと突き進む時代に、共通の場にたつて聖職者と信徒は団結し、働くことができる。」信徒が信仰に対して「服従」するのは「理にかなっている」と教会が教えるのは当然であるが、それは信徒に一層自立が許されるときにのみ可能なのである。聖職者は、生きている信徒の力が教会から誤りを除くということに信頼しなければならない。

しかしながら、このことは放縦を擁護するのではない。法のもとで自由でなければならない。間違いを犯す自由には当然、間違った時に叱責を受ける義務が伴う。ニューマンのビジョンには男性的な規律がある。我々の特権は

声をあげることであるが、ローマの義務は信徒と同様に、心から明快に答えることである。思いやりと明快さは双方に必要であるから。次の言葉はなんとイギリス的であろう！「我々は叩かれなければならない、ハッ、そうじゃないかね」しかし、この感想はワイズマンのイングランドより、アーノルドのラグビー校にあてはまった。ニューマンがアイルランドに冒険して破綻し、『ランブラー』を救おうとして失敗したことについて思いめぐらし、オクスフォードに教会と家を建てる計画を始めた時、「最初から一貫して教育が私の分野であった」と述べたのも驚くにあたらない。

『信徒に聞く』が重要なのは、議論を政策や法規の領域から外して、神学の領域内に明白に位置づけたことである。それはある教育上の協力の問題に対する司教の態度についての非難の応酬ではなくて、教会のまさに中心である精神と組織の中での信徒の占める位置についての議論となったことである。